

琉球語彙 (二)

伊波普猷

Kwi-zukuri「ロエ・ツクロヒ」咳ばらひに似たことで、自分がやつて來ることの合圖。國語のこわづくり(聲作)・こわづくりひ(聲繕)と同じ語である。人の家を訪れる時、或は外出してゐた主人が歸宅する時、門先で能くそれをやるが、隣の部屋で自分の悪口などしてゐる時にも、自分此處にゐるぞと警戒を與へる積りで能くやる。「たちよりてこわづくりたまへば、このうつほの人は夢を引きやみて、あやしがりて見たまへば」(源氏空穗)のこわづくりと同じ用ゐ方は、今でも盛んにやつてゐる。試みに、この「こわづくりたまへば」を琉球語に直して見ると、Kwizukuri mishocha kutu になる。だが、Kwizukuriにはことさらに聲をつくりひて言ふことの意はとうに無くなつてゐるので、「有國、砌にさむらひけるが、すこぶるこわづくりひを申したりければ」(十訓抄)のこ

わづくりひに相當する言表しには、tsukuri-kunti が使はれてゐる。この「こわづくりひを申したりければ」も琉球語に直して見ると、tsukuri-kunti sshi myunukita kutu になる。Sshi は國語シテに當る。
Si-zukuri「ス・ツクロヒ」牝鶏が卵を生む前に、方々から材料を集めて來て、世話しうに巢を作つてゐること。巢繕ひの義。

Kuga-gwi「ロガ・ゴエ」牝鶏が卵を生まうとして、頻りにクークトクーといふ聲を出すこと。卵聲の義。

Sukunnu「スクム」その古い形は Sukunyan で、那覇の方言に遺つてゐる。巢へつくの義で、スクム又はスクマル(疎む即ちちぢこまつて動かないの義)から來たものである。

Simuru「ス・モル」國語のすもり(古語)と同語で、孵化しないで、巢に残つてゐる鳥の卵即ちすもりこの義。

和名抄には「暇、和名、須毛里、野王接、暇者、卵不孵也」と解してある。その語源は巢守だといふ。この語はスィムラ・スィムリ・スィムン等とは活用しないで、語尾にナユン(爲る)をつけて活用させる。

Sidiyun「ス・デル」孵るの義。スモルに對する語だか

ら、其の語源は巢出に違ひない。Sidira(將然)・sidiyi(運用)・sidiyun(終止)・sidiyuru(連體)・sidiiri(命令・已然)と活用し、その他動詞は、sidasu(將然)・sidasshi(連用)・sidasshun(終止)・sidasshuru(連體)・sidasasi(命令・已然)と活用する。蛇や蟬などの蛻くには、sidi-kayun といひ、其のぬけがら(蛻)には、sidi-guru とす。

『おもろちうし』の十三の卷の百五十六章に、「君南風(久米島の祝女の頭)はたかべて、たすこ山登て、撫で松はけらへて、はねうちがま(羽撃きする小)すだちへ、飛ぶ鳥と競ひして、帆走やせ」といふオモロがあるが、君南風は神に祈りて、タスコ山に登り、素性よき松を切倒して、小舟を作りぬ。飛ぶ鳥と競争して、帆走らしめよ、といふことで、之を見ると鳥類を靈物と考へてゐた南島人が、船を造るを雛を孵すに譬へて、その船に命名するに海鳥の名を以てしたことがわかる。同卷の百六十三章にも、「はねうちとみ(羽撃きする舟の義)すだちへ」とあり、百九十八章にも、「親御船すだちへ」とある。

そしてこの話は、やがて高貴の人が誕生する義にも轉じた。即ち生るは *munaiyun* であるが、其の敬語は *sidiyun* である。貴種は直接女の腹から出るのではなく、

或聖なる存在から、所謂中間宿主を経て、他の存在に移されると考へたから、これを表現するに孵化する義の *sidiyun* を借りたのは當然なことで、赫映姫が竹の中から出たといふ傳説や、高麗朝の太祖が卵から生れたといふ傳説と照合せて考ふべきものであらう。この語が國語のあれますと比較して研究すべきものであることはいふまでも無い。この語の語幹は *sidi* であるが、これから種々の複合語が出来てゐる。例をオモロに取つて見ると、

十九の卷の十章、琉球統一の英主尚巴志の誕生を歌つたオモロに、「作敷苗代に、すでもの・眞物、眞玉の跳上る善子」といふものがある。眞物はすでもの(産兒)のシノニムで、これには靈物の義がある。おたかべの詞にも「思子・御すでもの、左右百果報の有る様に、お守り召しやうち云々」と見えてゐる。思子は御子様の義で、おすでもののシノニムである。又戯曲「護佐丸敵討」にも「道障りしゆたる護佐丸も殺ち、産し子刈捨てて、すでぐわ刈捨て、云々」とあるが、このすでぐわは産し子のシノニムで、こゝでは遺子の義に用ゐられてゐる。今少し例を戯曲に求めると、銘刻子(羽衣)に「やあ、父親よ。すだい母親や尋めれはも居らぬ。思姉と我や如何がしゆゆ

ら「すだい母親や、世界の人あらぬ。天降しやる女、天降りしやる女」といふのがある。このすだいは生みの義である。

混効験集に「すだいやり、拜でする事也」きこゑ大君がなしだにすとよみよわれ。下司眞人すだいやり、ちよわれ、と有」とあつて、すだいやりを拜謁しての意に解してあるが、これはこの語の意味を取りちがへた上に、自他を混同したものである。引用してあるオモロは、六の巻の十五章に出てゐるもので、そのすだいやりには生みて、生みてマア、生んでからに等の義があるから、後半だけを意譯して見ると、國民の慈母に在すといふことになる。これに似た表現法が、十六巻の二章にも出てゐる。即ち「きこゑあまわりや、國の兄弟産しよわちへ」で、名たる阿摩和利は國民を生み給ひて、の意であるが、これには勿論國民の親になり給ひてといふ程の意味がある。

それから、妊娠してゐるには、Sidi-gafu shon(すで御果報をしてゐるの意)といふ場合もあるが、これには恵まれたる状態になつてゐるといふ言語情調が伴ふ。後には目上の人から物を頂戴することを sidi-gafu とし

やうになつたが、これには御手厚き御恩命の義がある。

「銘刈子」に「たうく、果報事どやゆる、すで事よだいもの、押列れて宿に、躍て戻ら」といふ文句がある。そして後には Sidi-gafu・sidi-u-gafu・u-sidi-gafu などの同義語も出来、やがては sidi-yun が頂戴するの義に用ゐられるやうになつた。『混効験集』にも、「百すでやべて、冥加難有と云事也」といふことが見えてゐる。やべては侍りての意である。オモロの七の巻の四十三章に「首里降る雨や、すで水ど降りよる」といふことがあるが、このすで水はありがたい水の義である。戯曲「忠臣身替」にも、「あた(突然)よしれやり(参上し)、御褒美すでゆすや(頂戴す)、我が身とも似合ぬ、恐しや有もの、夜霊も御奉公肝も肝盡ち、あまく(精出)働きやり、行き積る年に、島里も拜(拜領)、位階もすでて、御掛ぶさ(さく)御代に樂よ歡やべら」といふことがある。琉歌にも、「二葉ある松の老木なるまでも、御掛ぶさい召しやうれ。拜ですでら(拜見いた)」といふのがある。

今一つ注意すべきは、「すで水」に産湯若しくは若水の義のあることである。『混効験集』に「すで水、誕生の時明方の井水より水を取り撫でさする也。其の水を撫水

(一本に)と云」と見えてゐる。それから一般に沐浴するを

sidi-yun としふやうになつた。琉歌に「源河走川や、潮か湯か水か。源河乙女のおすでどころ」といふのがあるが、このおすでどころは沐浴齋戒する所の義である。大方水の女神達の誕生でも見た氣持で歌つたのであらう。

近代に至つて、貴人が沐浴するを、u-sidi-mishen としふやうになつたが、古くは一般に沐浴すると sidiashun といひ、今では化粧するの義に轉じて、minadishun の同義語として用ゐられてゐる。

『俚言集覽』の中に「あらふ、生を活用して新の義となり、新を活用して洗の義となる也」といふことが見えてゐるが、これは非常に面白い説で、sidi(孵化)から、貴種誕生の義が生じ、それから沐浴の義が生じたいき方に似通つたところがある。

以上は、四年前に脱稿した『琉球戯曲辭典』(近)中に出したものを書直したものだ。琉球語に誕生を意味する二種の語のあることは、折口信夫氏もとうに氣がついて、「若水の話」(古代研究上巻一四)の中で、同様なしかも意味深重な説を發表されてゐる。氏の論文を読む人は、氏が所謂表面採集家達と選を異にして、南島の民俗及び方言

中に、「生活の古典」を見出したことを驚かすには居れない。卑説の如きは、言はゞ氏の説の補足に過ぎない。たゞ氏と説を異にする點は、氏が稜威(其語源は)若しくは神聖を意味する「すぢ」から sidi(誕生)が來たとするに反して、私は孵化を意味する sidi が誕生の義に轉じたことを見ることである。オモロに「すぢ子産ちからや、我が身若くなて」といふことがあり、sidi-gafu を「せぢ果報」と表記した文獻もあるから、せぢ(sidi)とすで(sidi)との間に關係があるのは、明であるが、どんな抽象的な形而上のやかましい語でも、そのもとはごく淺薄な物質的な事から出來てゐる例が少くないから、せぢの如きも、巢出から出たのではないかと私は考へてゐる。

Aa-kani(アラ・カミ)『琉球國中山正鑑』に、「荒神と申するは海神也。是は世濤季に及び、不仁亂逆の者共出來る時、三十年や五十年に一度現給て、刑罪を行て、使諸枉者直。是も二七日の訛遊也。ワウに出現し給ける。俗にワウノミオヤダイリとは申す也。云々」とある。ワウは澳の義で、港の入口などにある小島のことである。細註には、この神は、必于奥(澳の)出現故俗奥之公事、と見えてゐるから、一旦小島に上陸して、それから國土清

淨の公事に従事したと考へられてゐたことが知れる。荒神はもとより當字で、そのあらは生・洗と關係のある語に違ひない「若水の話」に、「すでるの原義は謂はゞ出現する事であつた。日本で言へば、出現の意のあるといふ語である。或はいづである。すぢのつく動作を言ふ語で、即ち、母胎によらぬ誕生である。あると言ふ日本語も、在の義と言ふよりは、すでる義があつたのではない。荒・現・顯などの内容があつた。あら人神などいふのも、すぢ、(人間)にして神なる者と言ふことで君主の事である。地方の小君主もあら人神なるが故に、社々の神主としての資格に當るので、其を回して、其の祀る神にも言うた」とあるのを参照して頂き度い。

Shikami (シキヤミ) 鬼界の方言。Shichami ともいふ。初浴の義で、沖縄方言の *nizi-nadi* (水撫) 又は *nibi-nadi* (御盥撫) に當る。舊曆八月の初の日即ち節折目(節折の義)に、七歳迄の男女の子のゐる家では、強飯を炊き、(その年に生れた稚兒の爲には特に赤飯を炊き)、其日まで誰も汲まない新井川につれていつて、握り飯を頭上に置きながら、薄の葉で初水をかける儀式があるが、この頭上に握り飯を戴かせる祝ひは、平安朝時代の戴餅

のそれに似通つてゐる。因にいふ。沖縄にも新川といふ地名は方々にあるが、古くは鬼界島のアラハと同じく、すで水又は若水に關係をもつた所であつたらしい。之に對してミীগー(新井戸)といふ語があるが、新しく出来た井戸をさういつてゐる。ミイは國語のニヒに當る。

Arahi (アラ・メ) 能く死靈を見る人のことで、普通睫毛の長い者に多いといはれてゐる。新目即ち誰よりも先に死靈を見る人の義である。

Arazori (アラ・サウリ) — *Nre-zori* (ムカヒ・サウリ) 昔は舊曆十一月、田植に先立ち、吉日を選んで、苗代から苗三本田に移し植ゑる行事があつたが、之をアラゾーリといつた。十二月に入ると、ンケーゾーリと稱して、更に苗七本を田に移植し、それから數日経つて、一般の田植が始まつた。この二語の意味は、苗をおろすことの義であるか、判然しないが、アラに新即ち初の義があり、ンケーに迎への義のあることは明である。

この項を書き終つた後、但言集覽を繙くと、「さおり、上總の方言、五月初めて苗を植ゑるをサオリと云。遠江も同じ。又サウリとも云」とあるのを見て、琉球語の *sohi* (サウリ)、が古代日本語の遺言であることを知つた。思

ふに、苗を植ゑる形式も、古俗の保存されたものであらう。

Sakanke (サカ・ムカへ) 一族を代表する戸婦の一行が、三年おき或は七年おきに、祖先發祥の地に詣で、歸る日、一族中の老弱男女が、之を郊外の坂の邊で迎へて、慰勞會をやること。倭訓栞に「さかむかへ、坂迎の義。

京都の人參宮せしを歸路に迎ふるをいふ。其もと東へ下る人の歸りを逢坂まで出迎ふるよりの名成べし云々」とあるが、この風習とそれを表す語が、いつ頃どうして南島に這入つたかは、知るよしも無い。この語は鬼界島では、*Sanke* と訛つて、遠方から来る親戚などを迎へる義になり、八重山では *Sakamukai* とつたやうに、原形に近い形で發音されながら、婚禮祝の時、花嫁の入り来るを玄關で迎へる者の義に轉じ、與那國島では *Sakamukai duyri* (坂迎祝の義) となつて、一般宴會の義に用ゐられてゐる。

Minkaw (メンカウ) 子供を威す戲で、下駄を指頭で強くおしつけて、臉の内側を赤く剥き出すを *mikehuan* (目を反す) といひ、さうすると同時に、*minkawu* と唱へるが、この語は國語のめかこう(轉じてメカコウ)と同

語で、目赤の義であらう。これが變形してこわい顔付を *minkawu* といふ小兒語も出来てゐる。大鏡に「筆の皮を男のおよびごとに入れて、めかこうしてちごを威せば」とあるが、かうして竹の子の皮を指ごとにさし入れる兒戲も、一時代前まで遺つてゐた。

Kata-wakiti (カタ・ワキテ) 勝負を争ふ爲に、人數を右方と左方とにわけることで、方分の義。かたわき(古語)に當る。活用すると、カタワキヲ(將然・カタワキイ(連用)・カタワキユン(終止)・カタワキユル(連體)・カタワキリ(命令・已然)となる。試みに、源氏空穂の「男女かたわきて、石はじきし給ふ」を琉球文に直すと、*Yiiga yinagu kata-wakiti, ishihanché (shi) mishiéu u S (たやうになる。(最上の敬語の場合には shi はいらなS) Katawakiti* の語尾を長く引張つて、*katawakiti* にすると、さうすることの義となる。さうした遊戲をするといふ言表には、それに佐變の動詞(セ・シ・ス・スル・スル)に相當する、*ssa*(將然)・*shi*(連用)・*shun*(終止)・*shuru*(連體)・*ssi*(命令・已然)を附ける。文例にも出てゐる通り、「して」に當る語は、*sshi* になつてゐるが、それは *shichi* の變化した形で、連用形の *shi* と區別されなけ

ればならぬ。序でにいふ。ss と ssa とは長子音(所謂促音)で、國語では語間にしか現ないが、南島語では、朝鮮語と同じく、語頭にも現れる。

Tu-tachi「ト・アハセテ」「と同時に」の義。枕草子の「いかゞと啓するにあはせて、臺盤所の方に、鼻い高くひたれば」の「あはせて」と同語である。「一寸見たところ、兩者は全然別語のやうな觀を呈してゐるが、琉球語の音韻法則を參酌すると、全く同構造のものであることがわかる。私は東條操氏編纂の『南島方言資料』の附録文例は説明に「起きなけりやを意味する ukiran-d-are の d は、フランス語の *le-tirer* の *t* の如く、婉音法に基づいて、挿入したもので、那覇の方言では、やはり ukiran are になつてゐる」と書いて置いたが、tu-tachi の *t* も、同じ理由によつて、挿入されたもので、この *t* を取ると、*tu achi* (↗ *tu awachi* ↗ *to awasete*) になつて、「にあはせて」に歩みよつて来る。今兩者が上の動詞に續く具合を比較する必要上、右の文例を琉球語に直して見ると *Chā debiru ga ndi myūnukiyusi tu-tachi, u-déju wuti datén hana-fiteharé* になる。この語は、國語では終止形に續くが、琉球語では連體形から *ru* を取つた所謂下

也。或はおやまでいとも云ふ」と見えてゐるが、このまゝいさ (manadi) に「母惑ひ」(母を喪ふこと又は其の者)の義のある事は、其の同義語に「親まぢさ」(*uya-madi*)があるのだから。そしてそれから、更に放浪又は放浪者の義も派生してゐるが、其の意味は *yā-madi* (家惑ひの義で、稍々國語の戸惑ひに近し)とさふ語と比較して考へたら、もつとはつきりして来る。戸惑ひには、(一)夜中俄に目をさまして、方向をあやまること、(二)過つて他の部屋又は家に入ること、(三)あちらこちらに迷ふことの義があるが、琉球語では、(一)には *yā-madi* とは言はないで、*nizamasa*「ネザマサ」といふをり、*yā-madi* には自分の家を見失ふことの義があつて、(二)の義は無いから、(三)の義だけが戸惑ひと共通するのである。これに類似的の語に、*ana-madi* (穴惑ひ)といふのがあつて、蟹などが、穴を塞がれて、狼狽する事をいふが、鳥類の場合には、*Simaci* (巢惑ひ)が用ゐられる。氣塞即ちいきづむことには、*ichi-madi* (息惑ひ)といひ、子供が秘結して、大便が肛門に引掛つて苦しむことを、*nua-madi* (*nua* は大便の小兒語)といふ。それから故郷を離れて、放浪することを *shim-madi* (島惑ひ)といふ

略法に、事又は者を意味する *si* を附けたものに續く。

概括的にいふと、國語の「*ニ*」といふ耳爾遠波は、終止形に續くが、それに相當する琉球語の *tu* (ト) は、*si* を伴ふ下略法に續く。序でにいふが、之に相當する那覇其他の方言は、*tu-majun* である。tu achi は發音しにくいから、自然これに代へたと思はれる。この語は首里でもやはり tu-tachi のシノニムとして使はれてゐるが、前者が「と同時に」(*as soon as*) の義に用ゐられるに對して、これは多く「一緒に」の意に使はれる。いはゞ、首里語は言表し方が綿密になつてゐるわけである。majun は majun と發音してゐる方言もあるが、オモロ時代の「まぢよ」(共に)の轉訛した形で、majun ichun (一緒に行く)といつたやうに、副詞として用ゐられてゐる。其の敬語は、umajun である。オモロには、「首里の王と天に照る日とまぢよにちよわれ」といふ用例がある。

Madi「マヂ」Madi の轉訛した形。「惑ひ」の義から「喪失」の義に轉じ、更に「孤獨の義にも轉じてゐる。

この語は他の名詞の下について、複合語を造る時にのみ現れるが、鬼界島の方言では、單獨に現れて、喪失の義に用ゐられてゐる。「南島八重垣」に、「まいでい、孤獨

てゐる。鬼界島の方言で、命を失ふほどの目にあふことを *inuchi-madi* (命惑ひ)といふのも面白いことである。かういふ種類の複合語は、他の南島方言にもあるに違ひない。國語では、戸惑ひ以外には、大鏡にあるやうな院のおはしますなりけりと見て、車ども、歩人も、てまどひし立騒ぎで、いともさわがし」のてまどひの一例しか私は知らない。これは手惑ひの義で、手の置所なきさまにいひ、あはてふためく事に多くいふとのことだが、これに相當する琉球語は *ma-ma* で、準備が出来ないうちに、客に來られたり、肝腎な必要品がなかつたりして、面喰ふさまにいふのである。この語は多分かつて存在してゐたであらうところの *ma-madi* (手惑ひ)の崩れた形であらう。この語から思出したが、迅速又至急を意味する語に、*shō-madi* とさふがある。この *shō* は *shō-nugiyun* (よくたぐる。性抜の義) *musshō-nai* 或は *musshō-ni* (何れもあはての義) *musshō* は無性で、其の疊語法は *musshō-tusshō* (ある) *na-ni* *shō* と同じもので、*tamashi* (魂)の同義語だから、*shō-madi* の原義は魂が抜け出して、じつとしてゐないことであらう。*Shō-madi sshi 'ijan* は大急ぎで行つたの意であるが、人を

せき立てる場合には、單に *sho-madi* といふこともある。前にも述べた通り、親を失つたたよりない子の義を有する *ma-madi* は、放浪者の義にも轉じてゐるが、これは從來わからないものとされてゐた戯曲「大川敵討」中の難語を解釋するたよりになるものである。人質になつてゐる若按司(若君の義)を取戻さんが爲に、乳母と稱して谷茶城に入込んでゐる、村原夫人の密使となつて、村原の所へ急ぐ泊は、途中で行商人に扮して敵狀を探りに出た村原にとつつかまへられて、

御急ぎもやゆら、御無心も知らぬ、取付も無らぬ、望み事やすが、旅の上の御縁拜む(お目に)お情に、珍らしい事のこの頃に有らば、お休息のうちに、聞かち給れ。宿元のみやげ物語りしやべら。(文語體)

と話をねだられたので、

まいでいしんざあ。人の急げば、むゝ、確に村原の比屋やすが、しかいと見覺の無いらぬ。まづ口振て探て見だう。(口語體)

と獨口をいつてゐるが、此詞中の「まいでいしんざあ」(*namadi-shinza*)の意味は、今ではどんな古老に聞いてもわからない。だが、前後の關係から、之に煩さい旅人

の義のあることは、大體見當が付く。兎に角 *namadi* に放浪者の義のあることはすぐわかつたが、わかりにくいのは *shinza* の意義である。この語は今では單語として使はれないで、*shinza-kunza* といふ疊語法となつて遺つてゐるのみである。物事の煩雜な狀を表する語で、*shinza-kunza munu yun* といふ場合には、物言ふを形容する副詞になつてゐるから、くどくとかうるさくとかいふ意味になる。それから *shinza* の語尾を長く引張つて *shinza* にすると、しつこい人・うるさい人の義になるから、*namadi-shinza* が、放浪せる饒舌家即ちうるさい旅人の意味で使はれたことは最早疑ふ餘地がない。

Fufufutu-shun (「ホトホト・ス」) 欲しがつてゐる物を是非得ようとして、或は渴望してゐる事を是非成遂げようとして、或は思ふ人に一刻も早く會はうとして、胸が躍るの義。用例を一つ二つ出して見ると、*Yira ndi futufutu shun* (得むとてほとほとす)・*Ichira ndi futufutu shutan* (會はむとてほとほとす)のやうなものである。ほとほとすといふ動詞は、國語のどの辭書を引いても出て来ないが、古くはさういふ語もあつたのではないかと想像して、試みに造語してみたのである。といふ

は、萬葉集の卷の十五に出てゐる狹野芋上娘子の歌の中に、

歸りける人來れりと云ひしかば、保等保登之爾吉。君かと思ひて。

といふのがあつて、代匠記に、「ホトホトシニキは驚て胸のほとばしるなり、又悦びて立ほどばしるなり云々」といふ解釋があるからだ。作者別萬葉全集を見ると、土岐善麿氏も契仲の説に據つて、ほとほとに驚喜を當てゝ居られる。もしこれが正しい解釋だとすれば、萬葉時代そつくりの言表し方が、琉球語にまだ生きてゐることになる。試みに、略釋を續いて見たら、ほとほとを殆しく、いにきを死にきと解して、ほとほとにきを、餘り悦びて魂まどひきの意味に取つてゐる。そして折口信夫氏も、之に従つて、ほとほとにきを、びつくりして危く死ぬ處であつた、と解された(口譯萬葉集)。琉球語はまた、この種の解釋者にも都合のいい資料を提供する。即ちほとほと(殆しく)に當る副詞は *fuda* (ホダ)で、*fudakashi* と *na-fuda* と *si-hi*、危く・危うこと又はもう少しのところでの義を有つてゐる。その用例は *fuda shinutaru* 又は *fudakashi shinutaru* で、何れも危く死ぬところ

あつた、といふ意である。琉球語では、國語の「ぞ」に當る *du* で掛る時には、連體形で結ぶことになつてゐるのに、右の動詞が *du* なくして連體形で結んでゐるのは、その下に *ya* といふ感歎詞が省かれてゐる爲で、終止形の場合よりは一筋力が強くなつてゐる。

一寸お斷りして置くが、自分は萬葉の研究などに嘴を容れるがらでは無いのに、こんなことを云々するのは、この歌に就いては、古今の大家達が、あゝして説を異にしてゐるので、もしかしたら、この疑義を解決するたよりにならうかと、資料を提供した迄である。

Fufufutu-shun (「ホトホト・ス」) ぶる／＼震へるの義。*Fufufutu* は、寒い時驚いた時怒つた時などに、震へる形容である。その同義語には、*gategata* がある。そして國語の「たがたに相當する語には、*gachigachi* があるが、寒さ又は恐怖に戰いて、上下の齒をしかと合すことが出来ないことで、齒の根が合はないといふことには、*gachigachi furuyun* 又は *gachigachi shun* といつてゐる。兎に角、この *fufufutu* の語尾が一寸長くなつただけで、前項の *fufufutu* と概念が甚しく違つて了つた所を、注意して頂きたい。琉球語では、母音の長短は、語

頭にあると語間にあると語尾にあるとの別なく、重要視すべきもので、其の開合や子音の清濁と共に、語義に大なる變化を與へるのみならず、語尾に現れる *a e o* の長母音は、語法上の役目をさへ勤める場合のあることを知らなければならぬ。

Meshi-futyun 「ムシ・ホトル」 生臭い物を喫いで、腹の蟲が躍るの義。下の *futyun* が *futufutu* の *futu* の活用したものであることは、いふまでもないが、單獨に用ゐられることは、殆ど無いといつていい。この言表しは、普通餘りの欲しさに病氣みたいになるにいふが、美人などを見て頻りに心の動く義にも轉じてゐる。

Futyi-me (ホトリ・マヒ) 欲しいものを是非自分のものにしようとして、それに附纏うて舞狂ふことの義。前の動詞の名詞的言表しと見て差支へない。*Futyi* は *futyun* の名詞形 *futyi* の變形である。

Hahata-shun 「ハタハタ・ス」 何かやらうとしてあせる義。實行の手段等もいろ／＼考へるといふ言語情調が伴ふ。これには *futufutu-shun* が有つやうなパッシェネットな所はない。例 *moizuku ssa ndi hata hata-shun* (金儲をしようとあせて、鶴の目鷹の目になる)。

南隅高山方言考 (野村傳四)

アラシカモン

あらしこと云ふ詞が古書にある。註には雜兵とある。アラシカモンはあらしこの様な者と云ふわけで、頭丈な元氣一杯の下僕を云ふ。「アラシカモン一人丈で充分」と云つた時は老人や子供を除外して居る。無論いくらえらくても女は加はらぬのである。昔、丹波の國の大名由流木殿の若君が、江戸にお上りの際、道中の諸注意を奥家老から申渡さるゝ際に、萬事夜前申渡す通りだ。若黨、仲間、あらしこ、小者に至るまで、大酒を致さぬ様に馬次舟渡し等にて、がうぎがさつを仕つたらば曲事でおじやんべい。(丹波興作)とある。つまり昔の仲間小者と同じ意味に今日でも使はれてゐる。

アヤス・アエル

自動詞の時はアエル、他動詞の時はアヤスと云つて、血や汗の流れ落つる時に使ふ高山詞、やぶれし頭より御かくわくだりに血をあへして立田川の秋に異らずかし 福富草子)而して「血を流して」と關根先生の註がある。また古事記神代卷にも「血あえ」と云つて居る。